宮古島の戦跡：砲台・重火器の配備考（１）

平良　勝保

はじめに

戦時中に構築された宮古島の砲台と重火器の配備については、先行研究として、瀬名波栄／杉本和朗監修『太平洋戦争記録　先島群島作戦（宮古篇）』[1]（以下『先島群島作戦（宮古篇）』と略記する）に概要が示されている。砲台については、久貝弥嗣、山口直美、菱木勇一、西里咲子、川満広紀、森谷大介「宮古島市内の海軍砲台について」[2]と山口直美、久貝弥嗣「戦史資料にみる海軍飛行場と陸軍中飛行場の利用」[3]という論文がある。

その配置地点や砲門数について、いくつか気がついた点があるので、文献史学の立場から若干ではあるが卑見を記しておきたい。

１　砲台の配備と位置に関連する地図資料

（１）砲台名と種類

「宮古島市内の海軍砲台について」は、「海軍砲台は、当時の平良町、下地村方面に上陸を企図する敵艦戦を撃破する目的をもって配備されたとある(瀬名波編 1975)。本論では、この六つの砲台の名称について、それぞれの地域や地形などに由来して暫定的に『平良砲台』、『海軍飛行場の砲台』、『友利砲台』、『与那浜崎の砲台』、『パナタガー嶺の砲台』、『平瀬御神崎の砲台』と称」すると記す[4]。

「海軍砲台」という呼称は、『先島群島作戦（宮古篇）』に以下のように記されていることに由来すると思われる。

> 次に宮古島に配備された火砲は野戦重砲兵第一聯隊第大隊の十五サンチ榴弾砲を筆頭に大体次のようであった。
>
> △海軍砲台
>
> 十五糎加農砲（平良町南岸）
>
> 二十糎加農砲二門（海軍飛行場東高地）
>
> 十四糎加農砲三門（城辺町友利海岸）
>
> ー四糎加農砲一門（平良町ピンフ高地）
>
> 〃一門（城辺町与那浜崎）
>
> 十二糎榴弾砲二門（平良町干（ママ）瀬尾神崎）
>
> 記される
>
> （註・配備個（ママ）所は一部明確欠く）
>
> これらの海軍砲台は平良町、下地村方面に上陸を企図する敵艦船を撃破する目的を以て配備された。[5]

ここで友利砲台は、一個所と認識されている。「宮古島市内の海軍砲台について」は、『先島群島作戦（宮古篇）』の記載内容を紹介せず、いきなり「この６つの砲台」[6]と記しているが、これは同書に記された砲台をさしているのであろう。しかし、六つの砲台は、名称・数とも、決して自明なことがらではない。

「戦史資料　山砲兵隊第二十八聯隊（宮古島）」（JACAR=アジア歴史資料センター所蔵）には、海軍砲台について以下のように記されている[7]。

> 海軍砲台　五隊
>
> 一砲台ハ、兵曹長以下、約二十五
>
> 備砲ハ　友利砲台　　十五加　二門
>
> ピンフ砲台　十二榴　二門
>
> 与那浜砲台　十二榴　二門
>
> 平良砲台　　十五加　二門
>
> 六三高地　　短二十榴　二門

また、「戦史資料　山砲兵隊第二十八聯隊（宮古島）【整理番号ナシ】」の「陣地構築一覧表」から砲台の部分を抽出し、表１に示す[8]。

以上見ていくと、『先島群島作戦（宮古篇）』に記される六つの砲台をまとめて「海軍砲台」と称して良いかという問題がある[9]。

「宮古島市内の海軍砲台について」は、「平瀬御神崎の砲台」を含めており、すなわち一つめに、資料にない「海軍砲台」以外のものを海軍砲台と呼んで良いか、二つめに水際砲台の「友里九五．九高地東南方七百米」砲台や、同じく水際山砲台の可能性が高い平瀬御神崎の砲台に言及するのであれば、他の水際砲台についても言及すべきではないか。さらにまた、三つめに「暫定的」とはいえ、史料に明記されている砲台名を自由に代えて良いかという問題もある。

しかし、最も大きな検討すべき課題は、戦時と現在の地図資料との整合性も考えるべき課題である。

表１　砲台構築一覧表

番号	種類	砲数	位　　置
1	砲台	二	友里東方△九五．九高地南方五百米
2	〃	三	平良西方四四高地（平良砲台）
3	砲台	三	ピンフ北方△九五.六
4	〃	三	与那浜崎高地
5	〃	二	盛加西方高地（海軍飛行場？）
6	水際	一	友里九五．九高地東南方七百米
7	水際	四	新里八十八高地南方七百米
8	〃	一	宮国西南方一.五粁（km）
9	〃	二	増原北方一粁
			平瀬御神崎

※原文縦書き、カッコ内は筆者補足／六三高地 Ref.C11110010300 より

（２）地図資料の史料的性格

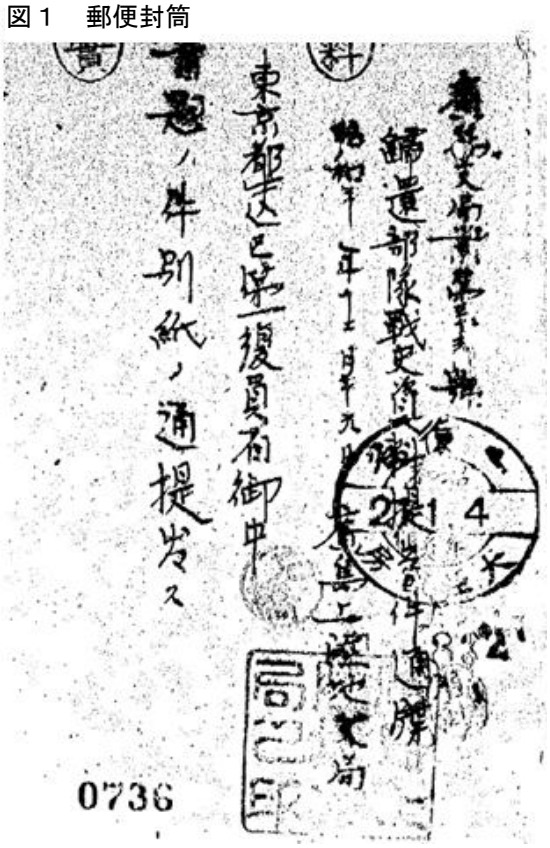
考察のまえに、地図資料の史料的性格について述べておきたい（それは同様に引用史料の史料的性格〔史料批判〕とも繋がる）。

Ref.C11110237900「番号ナシ　陣地構築一覧ほか（仮題）」には、二種類の地図が付されている。まず一つは、Ref.C11110237900、№866～867 の地図で、狩俣・池間・伊良部・多良間が省かれている。№869 には梶松次郎の直筆による「本陣地構築ハ宮古島ニ於ける作戦一年間の所産である」と記されている（昭和 20 年 12 月の成立とみられる）。名称が「陣地構築要図」と付されていることから、①「**陣地構築要図（仮題）**」、と称することにする（これは３枚になっているが資料としては一つにまとめた。花切の陣地地図№868 もあるがここでは検討の対象にしない）。この地図は「戦史資料　山砲兵隊第二十八聯隊（宮古島）（仮題）」（Ref.C11110010300）の３分割地図と同じである。同資料には末尾に「広島支局第三十弐号／帰還部隊戦史資料提出の件通牒／昭和二十年十二月九日、廣島上陸地□（方ヵ）局／東京都牛込区第一復員省御中／□題ノ件、別紙ノ通提出ス」と記されている。

二つめに、「戦史資料　山砲兵隊第二十八聯隊（宮古島）」№874～876 の３分割の地図である。これには「第一図 陣地構築要図」と名称が付されている（３枚になっているが資料としては一つにまとめた）。これを②「**第一図要図（仮題）**」、と称することにする。三つめに、「番号ナシ 地図 梶松次郎一文付（仮題）」（ref.C11110237700 №838～847）である。６分割なっており、現地で作成されたと考えられる。しかし、早い時期に作成されたと考えられるため、地図資料に情報量が少なく、必要に応じて言及したいと考えているがかなり取り扱いにくい。ここでは、原史料にタイトルが付されていないため、③「**山砲兵隊 地図（仮題）**」と称する。史料成立年を示しているのが、図１である。

以上が、信頼度が高い一次（当事者が記した）史料であり、次に『先島群島作戦（宮古篇）』収載の地図資料について述べたい[10]。同書は、戦

図１　郵便封筒



後宮古島における戦争の実態を明らかにしようとした力作ではあるが、軍隊・軍人の視点から描かれており、全面的依拠するわけにはいかない。いずれにしても、宮古島における戦争の実態を網羅的に記述したジャーナリストの著作であり、大いに参照するにあたいする。同書に収載された地図資料も参考にしたい。同書所載の地図を、**④「先島群島作戦地図（仮題）」**として活用する。本稿では③は不鮮明出あることから、①②④を主に参照することになる。③は、原本を見れば新しい情報を得られる可能性もあるが、今回は活用しないことにした。

①②④の地図は、それぞれ特徴がある。**①「陣地構築要図」**は、道路網が記され、標高（地形）もある程度わかり、火器や陣地の配置、その記号の意味も記されている。しかし、火器や陣地の記載数が少なく、全体像が分からない。**②「第一図要図」は、**最も鮮明で標高（地形）もある程度記されているが、道路網が記されていない。火器の配置や記号も多く記されている。しかし、火器や陣地の記号の説明がなく、水際砲台の記述もない。**④「先島群島作戦地図」**は、火器の配置や記号も多く記され、記号の意味も記され情報量が多い。しかし、道路網や標高（地形）道路網が記されているが、その位置や記号には、記号の形が他の地図と異なるところもある。また、戦後 15 年を過ぎてから書かれたものであり、一次史料との突合が必要である。

２　砲台の配置状況とその検討

「陣地構築一覧表」の番号にそって、各砲台について検討していきたい。砲台の名称は、本文の名称をベースにしたい。

（１）友利砲台と友利水際砲台

友利砲台は、「陣地構築一覧表」では「〔番号１／〔種類〕砲台／〔砲数〕二／〔位置〕友里（ママ）東方△九五．九高地南方五百米」と記されている（先述）。②「第一図要図」から部分を示した（図２の太線は海岸線を強調した）。はっきりと「１」と記されており、友利砲台であることが確認できる。ここでは、集落からの距離感を示すため集落の一部を示す斜線（左上）と「友利」の文字が見えるようにした。距離的には、

図２　友利砲台

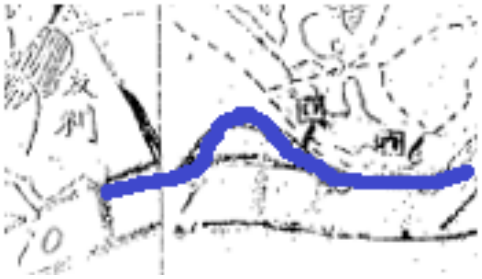


図３　友利砲台

仲原集落に近いが間に大野山林から南海岸まで続く山系があり、標高96.5mの丘がある（国土地理院地図）。「友里東方△九五．九高地」と同じ丘（高地）であろう。仲原鍾乳洞の南（地図上は西）にある。

図３の右手にも砲台の記号があり「６」の文字が見えるが、これは友利水際隠匿山砲台である。水際隠匿山砲台は、表１には「６／水際／１／友里九五．九高地東南方七百米」と記されている。１は高地から南500m、６は南東700m、図４は図２と図３をベースにして、友利・仲原を挟む山系でもっとも高い96.6mの丘を「九五．九高地」と推定して作成した。同地点は、2005年の『沖縄県の戦争遺跡　沖縄県戦争遺跡詳細確認調査の成果Ⅴ』に調査が行われ「東保茶根の戦争遺跡群」報告されており[11]、位置も示されている。したがって今さら、推定する必然性がないとも考えられるが、同書と『宮古島市内戦争遺跡分布調査報告書（１）－城辺地区・上野地区－』[12]とは微妙に位置がずれており、参考のため示した。図５と図６との大きな違いは、「西の砲台」と「東の砲台」が丘陵先端の小さな岬を挟むか否かである。地図上で見た限り、約350～400m離れ、標高も『宮古島市内戦争遺跡分布調査報告書（１）－城辺地区・上野地区－』では、20mほど低くなっている[13]。

考古学の成果や地図にもとづく、位置に長く言及したが、戦史資料にもとづく検討に戻りたい。

①「陣地構築要図」には、水際砲台は示されていない。④「先島群島作戦地図」には両方とも示されている。「戦史資料　山砲兵隊第二十八聯隊（宮古島）」には、「備砲ハ　友利砲台　十五加　二門」と

図４　国土地理院地図に示した①友利砲台と⑥友利水際砲台位置〔参考図〕

図５　『沖縄県の戦争遺跡　沖縄県戦争遺跡詳細確認調査の成果Ⅴ』第 40 図友利東保茶根戦争遺跡群配置図

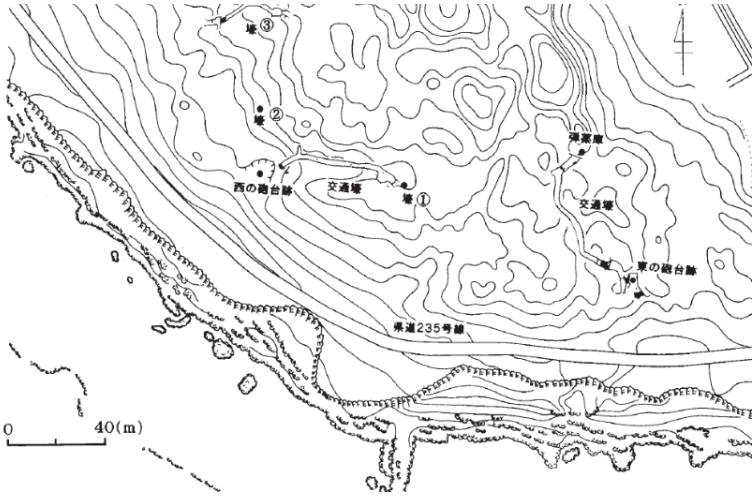
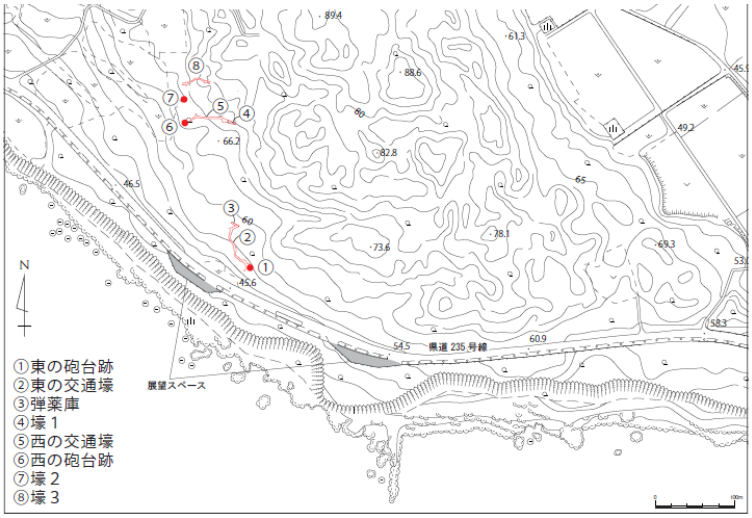


図６　『宮古島市内戦争遺跡分布調査報告書（１）－城辺地区・上野地区－』の図



第 81. 図　東保茶根戦争遺跡群位置図　※各壕の位置については今回の調査で、沖埋文 2005 の修正を行った。

記されている[14]。「十五加」とは、15センチ加農（カノン）砲[15]。「友利砲台」は、『沖縄県の戦争遺跡　沖縄県戦争遺跡詳細確認調査の成果』に報告されている「東保茶根の戦争遺跡群」のなかの西の砲台と同じ遺跡と考えられる。同書には、以下のように記されている[16]。

西の砲台は、現在は摺り鉢状に落ち込む地形を呈している。一部に岩盤を成形した痕跡が見られるが地形以外はほとんど痕跡を残さない。1945年（昭和20）に既にあった東の砲台を増設する形で西の砲台は構築された。砲身は南西を向いており、砲弾は上野村宮国あたりまで飛んだとのことである。東の砲台と同様に交通壕は砲台の東に接しており、岩盤、地山を掘り込んでいる。この交通壕も砲台へ向かって傾斜している。長さは約50mで壕①まで続く。この交通壕の北側に広がる平坦地は壕を掘り込んだ際に出た廃土で造成したとのことである。壕①は幅2.2～3.2m、高さは2.5m、奥行11mと規模は大きい。削岩機で岩盤を掘り込んで壕を構築していったが、完成を見ずに終戦をむかえたとのことである。

「宮古島市内の海軍砲台について」は、「友利砲台は、大きく東の砲台部分と、西の砲台部分、そして３つの壕では、西の砲台については、構築途中で終戦をむかえたとされる」[17]と記し、『沖縄県の戦争遺跡　沖縄県戦争遺跡詳細確認調査の成果Ⅴ』では「既にあった東の砲台を増設する形で西の砲台は構築された」と、「東の砲台」が先であったとしつつも、「西の砲台」「東の砲台」と区別している。「宮古島市内の海軍砲台について」は、「構成されている」と一歩進んだ記述となっている。

ところが、文献史料や図２と図３を見ると西の砲台が先に構築された可能性を考えなければならい。図３には、西の砲台付近には山砲が配備されている記号があり、山砲を設置していた場所に、水際隠匿山砲台を設置した可能性も浮上する。しかし、「宮古島市内の海軍砲台について」は、東砲台を友利砲台として認識しており、聞き取りによって確認出来たとして、以下のように記している[18]。

東の砲台の構築にあたっては、海軍313設営隊の他にも城辺青年団や周辺住民も砲台の構築をおこなっていたことが、体験談や聞き取り調査から確認されている。現在の城辺中学校の一帯には、青年会場があり、そこには海軍の本部がおかれ、城辺青年団も寝泊りしながら友利砲台の構築にとりかかったようである。この海軍の本部については、海軍313設営隊の第２中隊第２小隊をさすものと推察される。また、仲原の公民館やアブチャー（通称・仲原洞穴）には、この砲台の資材が置かれていたとの体験談や聞き取り調査も確認できる。／友利砲台の利用については、宮古島海軍警備隊の江口隊（隊長・江口善太郎兵曹長）が指揮していたようである。江口隊長は、仲原公民館近くに宿泊していたことが体験談や聞き取り調査から確認されており、５月４日の英太平洋艦隊による艦砲射撃に際しての友利砲台の指揮の状況なども確認できる。

ヒアリングは、主に仲原集落の人々から行っており、友利は含まれていない[19]。彼らが語っているのは、東の砲台であり、友利水際隠匿山砲台のことではなかろうか。指揮を執っていたのも海軍の江口隊だとしている。友利水際隠匿山砲台は海軍が管理し、友利砲台は山砲隊が管理していたのではないだろうか。「山砲兵第 28 聯隊戦史資料」（ref.C11110237800、ref.）によれば、本文には管轄の海軍砲台としては、

友利砲台のみが記され（先述）、「指揮隷属関係其ノ変遷ノ概要」には、「１．聯隊ハ主力ノ外、野戦砲兵第一聯隊第一大隊、独立混成第六十旅団砲兵隊、特設迫撃隊、独立速射砲第五大隊､海軍砲台ヲ併セ指揮シ先島集團砲兵トナル。２．独立速射砲第五大隊ハ、昭和二十年二月指揮下ヲ脱シ、集團直轄トナル」あり、海軍は指揮下にない。「第 10 方面軍作戦準備並に作戦記録（案）」の「第 10 章　海軍との関係」によれば、「３、[ママ]宮古、石垣各海軍警備隊ハ夫々第二十八師団長及独立混成第四十五旅団長ノ指揮ヲ受ク」とある[20]。　しかし、「陣地構築一覧表」には水際砲台も通常の砲台との連番で記されている（先述）。指揮権はないが、陣地構築には海軍第 313 設営部隊に協力したという意味ではないだろうか。

ところで、『先島群島作戦（宮古篇）』には、「江口隊（三十式十四サンチ砲一門）／兵曹長江口善太郎」という記述がある[21]。旧日本軍には「三十〔年〕式十四サンチ砲」という兵器は存在しない[22]。アジア歴史資料センター、「宮古島警備隊 解説」には以下のように記されている[23]。

> 1944 年４月、沖縄方面根拠地隊宮古派遣隊が編成。９月、宮古島警備隊となった。同根拠地隊は第 32 軍の指揮を受け、宮古島警備隊は先島集団（第 28 師団）の指揮を受けることになった。５月、沖縄本島の根拠地隊から高雄警備府の所属となり、同根拠地隊は７月に解隊となった。宮古島の与那覇湾に面し、海軍飛行場を含む海岸地区を守備。空襲や艦砲射撃による宮古島の海軍戦死者は約 150 名であった。

「沖縄方面部隊　安藤　第 60 旅団その他」によれば、要塞建築勤務第八中隊は宮古島警備隊より先に、「〔昭和 19 年〕五 八 宮古島上陸／自一九 五 九／至二〇 三 二五／宮古島附近の守備期間中、要塞建築隊業務に従事」したとあり[24]、山砲隊は、６月 27 日付の勅令によって８月 12 日に宮古島上陸した（戦史資料／山砲兵第 28 聯隊）[25]。要塞建築勤務第八中隊は宮古島警備隊より約４ヶ月先に、山砲隊は約１ヶ月先に宮古島に上陸しており、初期の砲台構築は要塞建築勤務第八中隊隊が手がけ、後に山砲隊が加勢して構築されたのではないか。

すなわち、東砲台（水際）は西砲台より遅れて構築された可能性が高い。仲原集落の証言者は、「友利砲台（西）」について指揮系統が異なることを知らなかったため、未完成と証言した可能性がある。

（２）平良砲台

平良砲台は、「戦史資料　山砲兵隊第二十八聯隊（宮古島）」によれば、「平良砲台 十五加 二門」と山砲隊の指揮下ある[26]。友利砲台のところでも述べたように15センチ加農（カノン）砲のことである。友利砲台では、十分な情報を提供できなかったが、国立国会図書館に所蔵されている「八九式十五糎加農設明書」について、国立公文書館所蔵のアジア歴史資料センターがネット上で画像を公開している（ref.A03032151400）。ここでは、そのさわりの部分のみ紹介しておきたい（１頁部分）。

八九式十五糎加農取扱法

総　説

第一　本砲螺式「アスベスト」塞環使用ノ閉鎖機水圧式駐退機及空気式復坐機ヲ有スル砲身後坐式ノ装輪開脚式火砲ニシテ､運搬ニ際シテハ接続砲身車及接続砲架車ノ二車ニ分解シ各車輌共牽引車ニヨリ､時速十五粁ニ於テ牽引運行スルモノトス

第二　接続砲身車ハ、運動間砲身ヲ積載スル車

輛ニシテ前車及後車ヨリ成リ、砲身ヲ砲架車上ニ載スヘキ諸溝ヲ兼ネ備ヘ、其ノ重量ハ七、四三〇瓩〔kg〕ナリ

第三　接続砲架車ハ、放列砲車ヨリ砲身ヲ除キタルモノニシテ前車及後車ヨリ成リ、其ノ全重量ハ、七、六一〇瓩ナリ

第四　放列砲車ハ砲身、閉鎖機、擔架、砲架、高低方向照準機、箭材、車軸、車輪及制轉機等ノ主要部ヨリ成リ、其ノ全重量ハ、一〇、四二二瓩ナリ

ネット上で得た知識を加えれば1929年（皇紀2589）10月に採用されたことから、この呼称となった[27]。

「山砲兵第28聯隊戦史資料」(ref.C11110237900)によれば、「陣地構築一覧表」では番号２に砲台があり、砲数３門、位置は、「平良西方四四高地」と記されている（先述）。「陣地構築一覧表」で３門となっているのは、構築後１門追加されたのでないだろうか。「宮古島市内の海軍砲台について」は、「山砲兵第28聯隊戦史資料」(ref.C11110237900)を読んだことになっているが、表１では２門となっている[28]。

「山砲兵第28聯隊戦史資料」所収の地図によれば、位置は図７・８の通りである。『先島群島作戦（宮古篇）』収載の地図とほとんど一致する。カママ嶺の頂上部標高は44mであり、筆者の年齢でも花切前山を「86高地」と呼んでいたことは知っており、カママ嶺を44高地とも称していたことを聞き取ることは容易であろう。

（３）ピンフ砲台

「山砲兵第28聯隊戦史資料」(ref.C11110237800)では、「ピンフ砲台　十二榴　二門」、「十二榴」とは、12cm榴弾砲のことで２門が配備されているが、ref.C11110237900の「陣地構築一覧表」では、番号２に砲台があり、砲数３門、位置は、「ピンフ北方△九五.六」と記されている（先述）。これも、構築後１門増えたのであろう。

図７　平良砲台（44 高地）

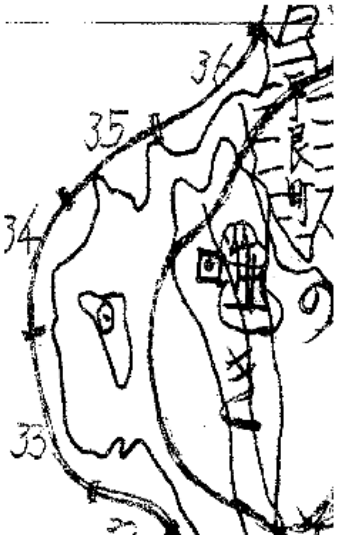


図８　平良砲台

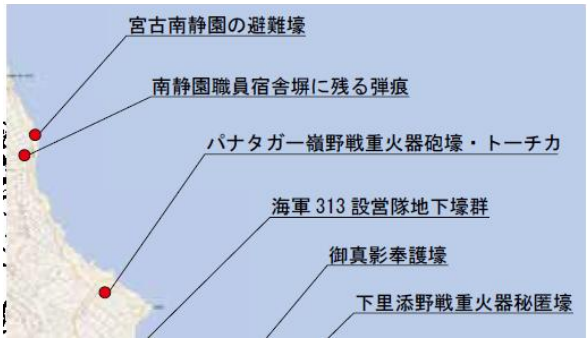
『沖縄県の戦争遺跡　沖縄県戦争遺跡詳細確認調査の成果Ⅴ』（2005年）では、「ピンフ嶺野戦重火器砲壕・トーチカ」と呼称され、以下のような説明がされている[29]。

ピンフ嶺（標高96m）の中腹に、南北約50mの地下壕が石灰岩を掘り込んでつくられている。人口の幅は約３mで高さ2.4m、床は平坦で壁や天井にはツルハシ等の工具痕が見られ、整形は粗い。天井はドーム状に掘り込まれており、内部は屈曲しながらピンフ嶺北側へ出る。途中、東西に分岐する小部屋が４カ所見ることができ、何れも奥行は２～３m程である。北側開口部はコンクリートで壁や天井は補強されており、重火器を配罹するのに容易な形態となっている。外側は登坂不可能な石灰岩

の急崖となっている。北側開口部から内部へ少し入ったところに西側へ分岐する通路がある。コンクリート造りの階段が17段設置されており、着弾地等を確認するための窓へ通じる。聞き取りからこの壕にはキャタピラの付属した重火器砲が出入りしていたとある。／中略／南側にトーチカが上下に２基残る。共に直径約１mの円筒型を呈し、銃眼が２つ、出入口が１カ所見られる、コンクリート造りの構築物である。内部は狭く、人一人が入れる程度の広さである。下側のものは現在、下草に埋もれており、単独で配置される〔上側のものは断絶している〕。上側のものは石灰岩塊の頂上部に配置されており、トーチカに至る石段やその北側には直径約１mの竪穴等の付属施設が見られる。

ピンフ嶺の名称は用いられているものの、砲台跡との認識はされていない。『最新の研究成果に見る宮古の歴史 - 文化講座資料・記録集 - №.２』（宮古島市教育委員会、2018年）の「宮古島市内の代表的な戦争遺跡跡位置図」では、「パナタガー嶺野戦重火器砲壕・トーチカ」と名前のみ変更されている〔図９〕[30]。2017年の「宮古島市内の海軍砲台について」では、２度目の名称変更がなされている（『最新の研究成果に見る宮古の歴史 - 文化講座資料・記録集 - №.２』の調査は同論文執筆の以前と考えた）[31]。管見では「ピンフ嶺」と、この戦跡を呼称したのは「宮古島市　ピンフ嶺戦争遺跡群【戦跡を歩く】」（NHKアーカイブス、2008年４月16日）が最後である[32]。案内者は、久高勝伯氏（昭和13年生）。

図９　ピンフ砲台



福山にゆかりのある人に尋ねたところ、パナタガーの上部附近をパナタガーンミ呼ぶ人もいるということである。標高地図で確認したところ、南のピンフ岳（嶺）最頂部の北に少しくぼみがあり、その北側ファームポンド附近がまた高くなっている。すなわち、パナタガー嶺とはピンフ岳の一部または北側を指して地元の人が呼称しているのであろう。ここでは、ピンフ岳（嶺）の一部にパナタガー嶺があると理解しておきたい[33]。

ピンフ砲台との関連性では、「宮古島市内の海軍砲台について」で、『先島群島作戦（宮古篇）』に依拠して「平瀬御神崎の砲台」も検討の対象としている[34]。同論文は結論として、「平瀬御神崎の砲台である。本砲台については、『先島群島作戦（宮古篇）』や、宮古島市総合博物館収蔵の沖縄戦時に米軍が作成した地図上〔典拠がない〕にもその位置がマークされていることからも、砲台としての認識されていたことは確かであるといえる。しかしながら、山砲第28連隊の戦史資料や、大下氏手記にもその記載が全くみられず、体験談からも本砲台に関する情報は得られていない。今後、本砲台に関する確認調査をさらに進めていく必要性がある」と述べている[35]。

「山砲兵第28聯隊戦史資料」（ref.C11110237900）には、「陣地構築一覧表」には砲隊以外の重火器の配備状況も記されている。そのなかでは、迎撃砲18門が宮古島に配備されており、迫撃砲連番13「ピンフ南方五百米凹地」の地点に12門が配備されている（№.786）。地図で示すと、①**「陣地構築要図」**には、ピンフ砲台〔砲台番号３〕（図11）の記号があるが、位置的には平瀬尾神崎に近い。またその南に不鮮明な○

があるが、意味は不明である。②「**第一図要図**」には、位置はずれているが15cm榴弾砲記号のところに「ピンフ」という文字が読み取れる（図12）。「ピンフ南方五百米凹地」の迫撃砲と思われる位置に砲台記号、サガーニ附近に山砲記号が見える（図12）。サガーニ附近の山砲は「陣地構築一覧表」には記されていない。「陣地構築一覧表」に記された重火器配備一覧は、①「**陣地構築要図**」と対応して配置地が確認出来るが、「ピンフ南方五百米凹地」の迫撃砲（地図表記記号）＝（一覧表記号）のみが地図　✕上に表記されていない。

図 11　ピンフ砲台

図 12　平瀬御神崎周辺の重火器配置

このように、地図に記号が記されていないこともあり、記号の記されている位置も正確ではない可能性もあるなど、ピンフからサガーニ附近までの重火器配置実態の解明は、困難な状況にある。「戦史資料　山砲兵隊第二十八聯隊（宮古島）（仮題）」には、「火力配置ノ重点ハ、南地区正面、北地区ノ佐川根湾〔西銘御嶽附近から平瀬御神崎まで〕及ビ平良地区トス」とある[36]。「第二十八師団戦史資料」には、以下の記述がある[37]。

ハ 佐川根彎ヨリ上陸スル場合

北、中、東地區隊ハ、協同シテ敵ヲ水際ニ撃滅ス

此ノ方免ニ於テハ、水際陣地ヲ以テ主陣地ノ前縁トス

敵上陸セル場合ニ於テハ、北地區隊ハ九五.五高地、七二高地ヲ確保シテ、大野山林ノ錯雑地帯ニ敵ヲ撃滅ス

〈三行略〉

砲兵隊ハ主力ヲ以テ、水際戦闘ニ協同、爾後ハ山砲隊及迫撃隊ヲ第一線部隊ニ配属ス

獨立速射砲ハ一部ヲ中地區隊ニ配属、主力ノ具体ヲ野原中核陣地ニ於テ退機セシム

ピンフ砲台から西銘御嶽附近までは、上陸警戒地帯であった。そのため、戦争が経過するごとに、さまざまな軍隊の動きがあったことが、資料解釈や陣地の位置特定を困難にしている。戦争は、まさに動的行動の最たるものであり、静的にとらえることは容易ではないことを前提として、資料や遺構と向き合う必要性があると思われる。〔（２）へ続く〕

補記　参考図１・２は不明瞭であるが次回（２）で補正し、分かりやすくしたい。

宮古島の戦跡：砲台・重火器の配備考（２）にむけて

予定していた分量より、字数が多くなってしまった。宮古を含む沖縄戦に対する知識がきわめて弱く、誤解や遺漏もあると思われるが遠慮なくご指摘を頂きたい。戦後 80 年という節目に、「あの戦争」〔近年呼称について様々な議論がある〕と戦跡に検討することは、自身にとっては苦痛であったが、「戦争はやってはいけない」との思いを確認できたことは幸いでもあった。続きは、次号に掲載したい。次回（２）では、以下のようなことを検討したい。

１．砲台（与那浜・海軍）、２．水際隠匿山砲台、３．その他重火器の配備、４．重火器記号５．戦死者等。

参考図 1 ref. C1111023790 0 より

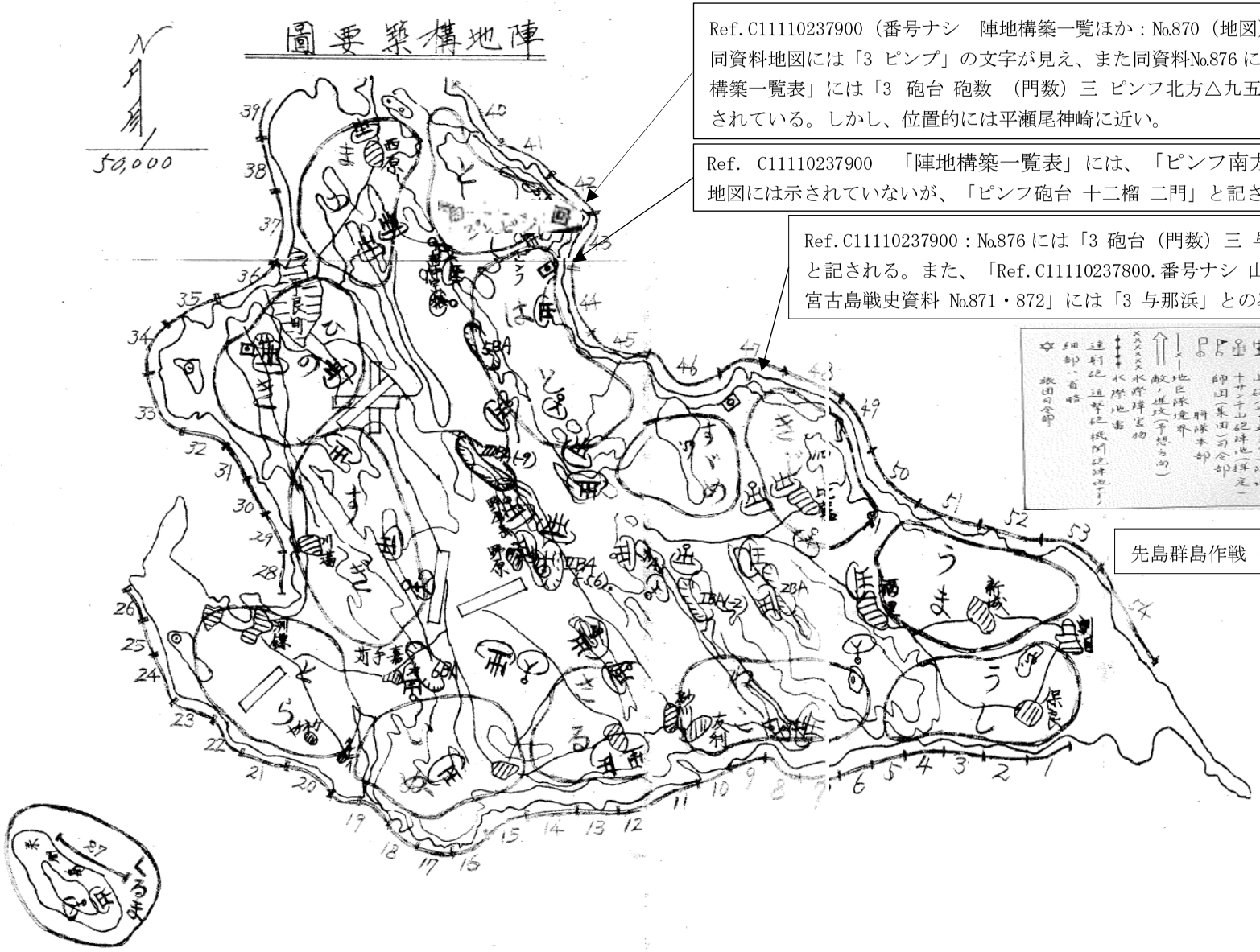
参考図２

Ref.C11110010300.『12　戦史資料 山砲兵第 28 連隊』№.732～734 をベースにして若干の補正を

Ref.C11110237900（番号ナシ　陣地構築一覧ほか：№.870（地図）より画像貼付
同資料地図には「3 ピンプ」の文字が見え、また同資料№.876 には「砲兵隊陣地構築一覧表」には「3 砲台 砲数 （門数）三 ピンフ北方△九五．六高地」と記されている。しかし、位置的には平瀬尾神崎に近い。

Ref. C11110237900　「陣地構築一覧表」には、「ピンフ南方五百米凹地」地図には示されていないが、「ピンフ砲台 十二榴 二門」と記されている。

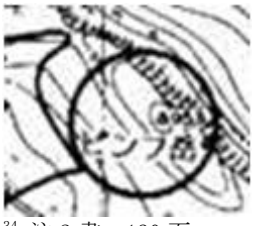
Ref.C11110237900：№.876 には「3 砲台（門数）三 与那覇浜崎高台」と記される。また、「Ref.C11110237800.番号ナシ 山砲兵第 28 連隊宮古島戦史資料 №.871・872」には「3 与那浜」とのみ記される。



先島群島作戦（宮古篇）より

[1] 1975 年、先島戦記刊行会、11 頁。
[2] 『宮古島市総合博物館紀要』第 21 号、2016 年。
[3] 『宮古島市総合博物館紀要』第 22 号、2017 年。
[4] 注２書、130 頁。
[5] 注１書、11 頁。
[6] 注２書、130 頁
[7] 整理番号 12　Ref.C11110010300、№716～717。なお、ほぼ同内容の ref.C11110237800 には、友利砲台とピンフ砲台は、欠落（表題同じ　番号なし　山砲兵隊第 28 連隊　№848～862）。
[8] ref.C11110237900、№874～876。
[9] 注２論文には、「海軍砲台は、山砲兵第 28 連隊の指揮下にあり、各砲台に兵曹長以下 25 名からなる隊が充てられ、海軍砲台を扱う部隊として５隊が編成されている(ref.C11110237900)」とあり（132 頁）、注７では「５隊とされているのは、山砲兵第 28 連隊の戦史資料においては、平瀬御神崎の砲台に関する記載が見られないことから、この平瀬御神崎の砲台を除く５つの砲台について述べられているからである」とも記す（同、140 頁）。「宮古島市内の海軍砲台について」は、５名連名で書かれている論文であり、Ref.C11110237900(番号ナシ　陣地構築一覧ほか　№863～877)を読んだが、全員が№866～867、№870～873 の地図と 874～876 の「陣地構築一覧表」を見ていないということなのであろうか。
[10] 『先島群島作戦（宮古篇）』は、1966 年の瀬名波栄『太平洋戦争記録　宮古島戦記』（宮古島戦記刊行会）改訂版であることは、周知のことであるが残念ながら、筆者は『太平洋戦争記録　宮古島戦記』を確認する術がない。『（宮古篇）』収載の地図資料に依拠することをご海容頂きたい
[11] 沖縄県立埋蔵文化財センター、2005 年、78～81 頁。
[12] 宮古島市教育委員会、2018 年、177 頁。
[13] 同書は、地図説明で「※各壕の位置については今回の調査で、沖埋文 2005 の修正を行った」と記しているが、これほどの誤差は、肉眼でも分かるのではないかと思われるほどの差である。なぜ、差が出たのか本文でキチンと説明する必要があろう。今ひとつ気になったのは、国土地理院の地図と等高線形が大きく違うという点であり、これに近い宮古島の地図を探したが見つけることは出来なかった。いずれにしても、「友里東方△九五. 九高地」を特定しないで、地図上に表示することは方法論的に疑問とせざるを得ない。
[14] ref.C11110237800、№716。
[15] 南城市教育委員会は、八九式十五糎加農砲モニュメント碑の説明を「八九式十五糎加農砲（はちきゅうしきじゅうごせんちかのんほう）／昭和４年に旧日本軍 によって、制式化された大砲で開脚式装輪砲架を持ち、遠距離でも命中精度にすぐれていた。砲身車と砲架車をそれぞれ牽引車で牽引して移動し、陣地で組み立てて使用したが、準備に１時間程かかったそうである。／大里村内には、1945 年３月に旧日本軍陸軍独立重砲兵第百大隊が布陣した際に、二門が配置された。しかし、沖縄戦 においては、米軍とのあまりにも大きな物量の差により、その効果は乏しく、一発撃つと何十、何百という反撃をうけたといわれている」と記している（八九式十五糎加農砲（はちきゅうしきじゅうごせんちかのんほう））　- Monumento(モニュメント)。最終閲覧日、2025/11/12。八九式のほか九八式あるが、ここでは沖縄戦で多く使用されたといわれる八九式の説明を採った。
[16] 発行沖縄県立埋蔵文化財センター、2005 年、78 頁。『宮古島市文化財調査報告書第 16 集　宮古島市内戦争遺跡分布調査報告書(1)-城辺地区・上野地区』（宮古島市教育委員会、2018 年）も同書を引用しているということであるが（176 頁）、引用の範囲が明確に示されておらず、漢字・ローマ字（カタカナ）の引用に若干の違いがあり、また短いがカットされた部分もあり、字数も 10 文字違う。注 14 書（発行沖縄県立埋蔵文化財センター、2005 年）、同頁。
[17] 注２書、134 頁。
[18] 同前。
[19] 「宮古島市内の海軍砲台について」注８では、中野隆作の新聞投稿記事を紹介しているが、中野は友利の人であり中野のいう「友利砲台」とは、「友利水際砲台」とは限らない。
[20] Ref.C11110383400.№735
[21] 8 頁。
[22] インターネット等あらゆる情報を調べたがないものを証明することは出来なかった
[23] 宮古島警備隊｜アジ歴グロッサリー（最終閲覧日、2025/11/14）。
[24] Ref3.12122494800、№1807。なお「ref.C11110010500.14　要塞建築勤務第８中隊」740～743。
[25] JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C11110010300.「12　戦史資料／山砲兵第二十八聯隊」、連番№76」には、「文字符／豊／編成年月日／昭. 16.7.16／隷下／二八師／所在地／宮古島」とある。Ref. C11110237800〔番号なし、表題部の次 1 頁欠か〕の記述は、Ref. C11110010300 と同様である（連番 850）。
[26] Ref.C11110010300、№717。
[27] 詳しくは、ネット上でいくらでも見ることが出来る。参考論文として、服部聡「第一次世界大戦と日本陸軍の近代化―その成果と限界―」（『国際安全保障』第 36 巻第３号、国際安全保障学会、2008 年）、横山久幸「日本陸軍の軍事技術戦略と軍備構想について―第一次世界大戦後を中心として－」（『防衛研究所紀要』３巻２号、2000 年 11 月）等を入口にして兵器の歴史を調べることができる。
[28] 注２書、133 頁。「山砲兵第 28 聯隊戦史資料」(ref.C11110237900)を精読したのか、疑わしい。
[29] 40～41 頁。
[30] 10 頁。
[31] 注２書、133 頁。
[32] https://www2.nhk.or.jp/archives/movies/?id=D0001860003_00000（2025/11/15 最終視聴）。
[33] 『沖縄県の戦争遺跡　沖縄県戦争遺跡詳細確認調査の成果Ｖ』（2005 年）では、ピンフ岳最頂部を含む地

点が〇囲いされていたため（図参照）、ピンフ岳を「パナタガー嶺」と呼称するようになったのかと思ってしまったが、そうではないらしい。ピンフ岳は、地質学的にも大きな意味を持つ地名である。『宮古島地域の地質』（通産省工業技術院地質調査所、1980 年）には、20 ヵ所にピンフ岳が登場する。また、「ピンフ岳泥岩」（同書 25 頁）、「ピンフ岳砂岩」（同書 33 頁）という地質分類もある。呼称の変更は、重大なことであり、他の研究分野への影響も考慮して本文での説明が必要と思われる。



[34] 注 2 書、130 頁。
[35] 同前、139 頁。同遺跡については、論文のなかで 7 ヵ所わたる言及があり、並々ならぬ関心が窺われる。
[36] Ref.C11110010300、№721。
[37] Ref.C11110031400、№962～963。